

2025年度（令和7年度）学校評価自己評価表

城北中学校区	校番 63	福山市立明王台小学校
最終更新日		2026年（令和8年）2月10日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 資質・能力	主体的に判断する力・課題を発見し解決する力・地域社会と協働して貢献する力
学校関係者評価報告書は全項目「十分満足できる」と評価された。中学校校区で連携を深め、共通の取組で成果をあげている。各校の目標が達成できていないものについては取組の進捗状況を細かく把握し課題克服に向けて PDCA サイクルに則り実践する。	全国学力調査の結果、福山市の平均正答率を上回ることができたものの、正答率40%未満の生徒の割合は少なくない。また、不登校児童生徒も少なからずいる。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	・自ら考え、主体的に判断し、自律した行動ができる児童生徒 ・豊かな心を持ち、お互いを尊重し、人を大切にする児童生徒
		中学校区として統一した取組等	・CS をベースにした校区合同研修と合意形成を意識した授業研究及び教科等部会の取組 ・DC 教育を基に、ICT を活用した個別最適化した授業実践及び協議・交流の取組 ・家庭での効率的な学習計画の立て方・メディアとの付き合い方への取組 ・地域と協働した合同行事や乗り入れ授業、「総合的な学習の時間」交流会の取組

III 自 校

ミッション		育成する力 資質・能力	主体的に判断する力	課題を発見し解決する力	地域社会と協働して 貢献する力
夢をもち、目標に向かって前向きに努力することを通して、地域に貢献できる 児童を育てる。					
学校教育目標		めざす 子ども像	互いの考えを認め合い、比 較・分類・関連付けたりしな がら自己決定している。	身の回りの課題を設定し、 友達と協力したり、目的や意 図に応じて必要な情報を整 理したりしてよりよい解決 に向けて考えている。	地域の人・もの・ことに 関わる活動を通して、地域 のよさを伝えたり、地域の 一員として自ら関わったり している。
自ら学び 豊かな心で たくましく生きるこどもの育成					
現 状		研究	テーマ	じっくり考え、自分の考えを表現できる児童の育成 ～「できる」「分かる」「考えてよかった」という思いがもてる活動を通して～ 基礎的・基本的な学力の定着	
〈児童生徒〉 ・全国学力・学習状況調査において、正答率 40％未満の児童の割合が、国語 14.8％、算数 29.6％であった。 ・全国学力・学習状況調査、学びの伸びを把握する調査等では、問われている ことの意味理解が不十分な児童もいる。 ・指示されたことなどすることが分かっていることは、快く引き受けて取り組 むことができる。自ら考えて行動することに課題がある。 〈授業〉 ・友達との意見交流を通して、自分の意見をもったり自他の意見を比べて考え たりする児童が増えた。 ・基礎的・基本的な学力の定着のための時間確保と繰り返し学習が不十分な単 元もあった。			内容等	問題解決型の授業研究の実践を年間を通して行う（プロジェクト活動型）	
		めざす授業 の姿	○思考・表現を促す活動の充実 ・思考を深める発問の工夫 ・話し合い活動の充実 ○基礎的・基本的な学力の定着 ・当該学年の学習内容について付ける力を明確にし、目的を児童と共有した反復練習など を行う。		

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立明王台小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	70% 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	70% 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
5	自ら考え学ぶ 児童(主体性) の育成	★	継 続	じっくり考え、自 分の言葉で表現 できる児童の育 成	・ペアやグループ で自分の考え を自信をもっ て発表する場 の設定をし、学 びを広げ深め る授業づくり を進める。 ・基礎的・基本 的な学力の定着 のために、時間 確保と反復練 習も行う。	・「自分の考えがう まく伝わるよう、 資料や文章、話の 組み立てなどを 工夫して発表し た」児童を85% 以上にする。(児 童アンケート) ・各学力調査にお いて、40%未 満の児童の割 合を5%減ら す。	□「自分の考えがう まく伝わるよう、 資料や文章、話の 組み立てなどを工 夫して発表した」 児童は、82.5%だ った。 □授業づくりポー トフォリオ作成 を通して、児童 の課題を明確に し、授業改善に 取り組んでいる。	3	3	・自分の考えを話す だけでなく、ノ ートにも書かせ、言 葉で表現するこ とを積み重ねる。 ・表現しにくい児童 には、文型を示 し、それをヒント にしながら自分 の考えをまとめ させる。 ・明らかになったつ まずきをもとに 授業や朝タイム を活用し、計算や ことばに関する 問題に繰り返し 取り組ませる。	□ノートに説明を 書いたり、ペア やグループ・全 体など表現の場 を増やしたりし たことで発表に対 する自信をもつ児童 が増えた。 ◎「自分の考えがう まく伝わるよう、 資料や文章、話の 組み立てなどを工 夫して発表した」 児童は、82.5%で あった。 □授業や朝タイ ム・放課後の学 力補充等を通し て、主に算数の 基礎的・基本 的な学力の定着を 図った。 ◎学力調査におい て、正答率40% 未満の児童の割 合(6.8%)に変 化はなかった が、学力補充等 に重点を置いた 算数について は、全国平均を 超えることがで きた。	4	3	3	・表現の場を多く 設定し、自分の 考えをアウトプ ットするように 仕組む。 ・正答率 40%未 満の児童のつま ずきに一層注視 し、反復練習も 含め学力の定着 を図るよう計画 する。
			見 直 し	自分たちで考え、 進んで生活をよ くしていこうと する児童の育成	・主体的に委員会 や係活動に取 り組むことを 通して、自己有 用感を高める。	・委員会や係活動 において、学校 や学級をよく するために進 んで活動出来 た児童を80% 以上にする。 (児童アンケ ート)	□「委員会や係活動 などで、学校や学 級をよくするた めに進んで活動 をした」児童は 87% だった。 □学級活動に関する 職員研修を行っ た。	3	3	・各委員会で、活動 の見通しを立て、 学校全体に早め に共有して進捗 状況を振り返り、 活動を充実させ る。 ・児童会で委員会掲 示板を作り、各委 員会の取り組み を可視化し、意欲 を高める。	□各委員会が毎月 の取組を掲示板 で周知したり、常 時活動以外の取 組を考えたりし て、積極的に提 案・実施した。 ◎「委員会や係活動 などで、学校や学 級をよくするた めに進んで活動 をした」児童は 90% であった。	4	4	4	・児童が主体的に取 り組めるように、 児童会役員や委員 長からなるリーダ ー会が中心になり 取組を整理し たり、提案したり する。

		★	新規	自ら進んで健康的な生活をしようとする児童の育成	・年3回、『メディアコントロールウィーク』を設け、児童が自分の生活習慣を振り返るとともに保護者啓発の機会をつくる。	・メディアコントロールウィーク中は、「平日のメディア使用時間を2時間以内にすする」児童を80%以上にすする。	□1 回目は各自が「起床」「メディア」「就寝」の3つの時間を決め1週間取り組んだ。その結果、84%の児童が時間を守って生活できた。保護者からは取組に対する肯定的な評価を得ることができた。	3	3	・学級活動、保健指導の時間等、あらゆる機会を通して健康的な生活習慣についての指導を継続する。また各種便りや学級懇談会等を活用し、家庭への啓発を行う。 ・学期に一度メディアコントロールウィークを設け、平日のメディア使用時間が2時間以内になるよう目標を設定し、取組を継続する。	□参観日でのDC教育や学級懇談会、PTA教育講演会等を活用し、親子でメディアについて考える機会を複数回設けた。このことにより、児童だけでなく、保護者の意識にもよい変化が見られた。 ◎「第2回生活習慣に関するアンケート調査（保護者対象）」の結果、77.5%の児童が「平日のメディア使用時間が2時間以内」であった。	4	3	3	・取組がマンネリ化しないよう、新たな情報等も積極的に取り入れながら、児童や家庭への投げかけ方を工夫していく。
1	元気・笑顔で学び続ける教職員		見直し	教職員が元気に笑顔で勤務できる環境づくり	・計画的に時間を確保し、学年をこえた教材研究を協働的に行う。	・授業づくりを行う時間が確保されていると感じる教員の割合を85%以上にすする。	□授業づくりの時間が確保されていると感じる教員は80%だった。	3	3	・毎週木曜日にグループで教材研究をする時間を確保し、単元の進め方を検討したり作った教材を共有したりする。	□教材研究をする時間を確保したことで、互いの悩みを交流したり単元の進め方を検討したりすることができた。 ◎授業づくりの時間が確保されていると感じる教員は、90%だった。	4	4	4	・継続して互いの指導の方法について交流を行う。
1	地域とともにある学校づくり	★	見直し	地域の人やボランティアの人に感謝の気持ちをもって行動することができる児童の育成	・児童会を中心に年間を通してあいさつを啓発する取り組みを実施し、地域の方との繋がりを作る。 ・地域の人やボランティアの人と関わりながら学習を進め、地域のかかわりを深める単元を計画・実施する。	・地域の人に支えられていると感じる児童の割合を90%以上にすする。(児童アンケート) ・各学年、学期に1回以上地域と関わる学習を実施する。	□「地域の人に支えられている」と感じる児童は91%だった。 □1 学期には、地域（明王台・福山市）と関わる学習を実施したが、明王台地域との関わりを深める学習活動としては不十分だった。	3	3	・毎月1回総合的な学習の時間や生活科において、地域との関わりを深めるための取り組みについて職員間で意見交流をする。 ・交流館と連携し、情報を得ながら単元内容を深めていく。	□全ての学年が地域と連携したり、地域のためにできることを考え実行したりする活動を行った。 ◎「地域の人に支えられている」と感じる児童は98%だった。	4	4	4	・今年度連携した地域の方とのつながりを生かして、継続して取り組む。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。